

神戸学院大学現代社会学部開設 10 周年記念講演会

「共生社会のために～ケア・地域・防災～」

講演者：西靖氏 (毎日放送アナウンサー)

日 時：2023年10月22日 (日) 11:15～12:15

会 場：神戸ポートピアホテル

現代社会学部 YouTube チャンネルよりライブ配信



皆さんこんにちは。毎日放送のアナウンサーの西靖と申します。今日はお招きいただきましてありがとうございます。

今ご紹介いただきましたプロフィールのとおり、私は民間放送でおよそ30年アナウンサーをしています。去年からお招きいただいて、大学で教えるといったことも始めましたけれど、キャリアのほとんどを取材現場やスタジオで過ごしてきました。ですから、私の生活にはほぼアカデミズムの要素はないわけで、深い洞察に基づくお話を期待されている方には、がっかりするような時間になってしまうかもしれません。ただ、先ほど学長とも少しお話をさせていただいたんですが、心強いことに「経験それ自体は学問ではないかもしれないけれども、そこには学問の種がいっぱいあります」というふうにおっしゃっていただきました。その言葉を胸に、蛮勇を振るってここに立っている次第です。

いただいたお題が「共生社会のために」。副題として「ケア・地域・防災」と付けていただきましたので、それに沿ってお話をさせていただきます。

私は1971年、岡山の生まれです。私より年長の人からは、71年生まれと言うと必ず「あ、万博の次の年ね」と言われます。その言葉を子どものころから本当に何度も何度も聞かされたので、当時の日本において70年万博というのがどれほど大きな出来事だったのだろうと、子ども心に想像しておりました。次の大阪での万博はどんなふう記憶に、記録に、刻まれるのでしょうか。

1994年に毎日放送にアナウンサーとして入社いたしました。アナウンサーというのは学生の時代からアナウンススクールに通ってスキルを身に付けて就職活動に臨むという方が当時も今も多いんですが、私はそういったことは一切していませんでした。陸上部に所属していて、棒高跳びという、その後社会人になった途端に何の役にも立たない、そんな競技をやっておりました。

今日は学生さんも聞いていらっしゃるということですので、就職活動という観点から振り返ってみましょうか。最近、学生さんから「学生時代に何をやっていれば役に立ちますか？」っていう聞き方をされます。若い後輩のアナウンサーと接していても、「今日の番組どうでしたか？」、「今日のあの私の仕切りどうでしたか？」と聞かれることが多い。SNS世代だからと限定するのは早計かもしれませんが、最近の若い方を見ていると、評価や効果の回収をすごく急ぐ傾向があるように感じます。「今やったことはいつ役に立ちますか？」、「今日の仕事の評価はどうか？」などなど。

もちろん短期的に目標を設定して、それを評価されて、それを土台に次の仕事をする、次の勉学に励む、何かしら新しい取り組みをするというのはすごく大切なことですが、そうした価値観からすると、陸上部の部室で、毎週月曜日になると週刊ジャンプを読み、読み終えたらウォーミングアップをしてびよんぴよんと跳ぶ学生生活はどんなふう映るでしょう。そこには評価の回収なんていう気持ちは全くありませんでしたし、棒を使ってぴよんと飛ぶスキルというのは社会人になった途端に何の役にも立たなくなりましたけれども、その時一生懸命やったこと、自分が好きなことを見つけたこと、同じような仲間に出会ったこと自体が財産だと、今振り返っても思います。時間と体力がいっぱいあって、役に立つか立たないかを度外視して夢中になれるというのは、実はとても贅沢だし、貴重です。

今、大学で授業をやっていますけれど、私の学生時代と比べると、驚くほどカリキュラムが緻密で、事前に「この15回の授業でこんなことが学べます」というシラバスがちゃんと開示されていて、学びのロードマップが明確です。もちろん大事なことです。でも一方で、何がその向こうにあるかわからないドアを開ける時のワクワクというのも大切にしてほしいと思います。

私は、就職活動中、ある会社を受けているときに、隣に座った学生に「毎日放送も受けるの？」って聞かれて、「いや、申し込んでへん。」って言ったなら、「エントリーシート、余分に持ってるからあげよか？」と言われて、ありがと、と受け取って、持ち帰ってその晩のうちに書き上げて、翌日が締め切りだったので、郵送では間に合わない、速達でも多分無理と思ひまして、雨が降るなか阪急電車に乗り、大阪・茶屋町の毎日放送に行って、受付のお姉さんに渡しました。そして今、私はここで偉そうに喋っているわけで、人生何が起こるかわかりません。

その後の職歴は見ていただいているとおりですが、結婚が大変遅くて、43歳で結婚しまして、45歳で一人目の息子が、その2年後に2人目の息子、そしてさらにその3年後、今から2年前に3人目の息子が生まれました。息子3人です。

今、次男が幼稚園に通っていますが、うちの幼稚園の運動会というのは、保護者の席取りが早

いもの順なので、みなさん朝4時や5時ぐらいから並ぶんですよ。やっぱり我が子が一番見えるところ、プログラムをいちばん楽しめる前の方、写真を撮りやすいところ、そういう席をもとめて早起きするんですね。

私ども毎日放送では、年に1回、3月に豊中で朗読のイベントをやっていて、ありがたいことに大変好評いただいています。で、このイベントでもやっぱり、アナウンサーの息遣いが間近に聞こえる前の方の席とか、音響がちょうどいい真ん中あたりとか、そういうところが特等席ということで、早くに埋まるんですね。

ところが私、去年から相愛大学で、そして今年から神戸女学院大学で、大学の教壇に立つという恐れ多いことをやっているわけですけども、教室の特等席はどこかという、最後列なんです。後ろの席から順番に埋まっていき、そして机の下で密かにスマホをいじり、時々船を漕ぐ。そういう姿を見るにつけ、私はなんと甘やかされた環境で喋ってきたんだ、そして大学の先生がなんと苛烈な環境で教壇に立っておられるのかということ、骨身に染みて感じる今日この頃です。

ただ相愛大学の学長の釈先生とお話をした時に、「西さん、テレビの視聴率は何%ぐらいですか？」と聞かれました。この間、クライマックスシリーズの阪神戦の第1戦をABCが放送しましたが、世帯視聴率で大体10%くらいでした。最近テレビはなかなか見られなくなりましたから、10%というのはすごくいい数字です。その横で、私どもMBSはオリックス戦を放送いたしました。こっちもクライマックスシリーズなんですけど、阪神の人気には敵わず、2%でした。10分の1かなと思ってたんですけど、2%ありましたから、想定の数倍あったわけで大健闘ではあるんですけどね。ともあれ、100人いたら2人ぐらいがご覧になったということですね。そんなお話のあと、釈先生が、「阪神戦ですら100人のうち10人ですよ、それを思うと、クラスに50人いたとして5人が目を輝かせていけば、10%でしょ。その授業は大成功ですよ。」と仰いました。「理想をいえば、途中まで下向いて携帯を隠れて触ってた学生が、『あれ、なんかちょっとこの話面白い』と思って目を上げてくれたら、それはその子の知性が刺激された瞬間、知ることによって喜びを覚えた瞬間です。その瞬間に立ち会えるっていうのは、教員の大変幸せな側面です。そういう瞬間に立ち会えるのが、教員の醍醐味ですよ。」と言われました。頑張ります。

今「知ることの喜び」というお話をしました。教育者のみなさんを前に釈迦に説法ではありますが、知るということは、色んな行動を起こす原点になります。現代社会学部には、コミュニケーションとか、防災の意識共有であるとか、そういったことをご専門に研究されている先生方も大勢いらっしゃると思います。

私どもは日々、エンターテインメントであるとか、教養であるとか、いろんな番組を放送していますが、私は主に情報報道系の番組に携わってまいりましたので、やはり思うことというのは、「知って大事」ということです。

「知る」の入り口は、何でも結構です。授業で何かを見聞きして、自分の知らない世界、理論、そういったものに触れることも大事ですし、新聞を読む、テレビニュースを見る、ネットニュースを見る、ちょっと興味を持ったなら検索して調べてみる、本を読む。入り口は本当になんでもいいです。そうしたことで、そのことに興味を持ったなら、今度はそれについて友達や家族と意見を交わすといったこともあるでしょう。

最近は議論のステージがSNSに変わってきています。「これってどうやろう？」って思ったらそ

れを書き込んでみる、反論がある、同調する人がいる、そういったところで議論が起こることもあるかもしれません。

さらに、そこから社会に対して働きかけをすることができます。署名活動をする、抗議活動に参加する。あるいは、「これ誰がやろうとしてるの?」、「なぜこんなことが行われようとしてるの?」その疑問を主権者として投票行動に反映させることが可能です。むしろ、そのことに資する情報というのを日々出していきたいと思って、我々は仕事をしています。

折込チラシで卵が安いと知ってスーパーに買いに行く行為から、政策について放送や新聞で知り、応援したい候補者に投票する行為まで、「知る」というのは行動の出発点です。このことは我々の仕事において非常に重要な認識です。このことを改めて、やっている私達も再認識した具体的な事例がありました。

ご覧になった方も多いたと思いますが、埼玉県議会で、自民党県議団が埼玉県虐待禁止条例の改正案というのを提出しました。そこには、小学3年生以下の子どもだけで登下校をさせたり、あるいは公園で遊ばせたり、さらには子供を家に残して留守番をさせたり、さらにはゴミ出しをするだけでも、それは放置にあたり、虐待とみなすと書かれていました。

県議会で多数を占める自民党議員団が提出したもので、10月6日、県議会常任委員会で可決されまして、県議会の常任会で可決されれば、基本的には本会議では可決されます、多数ですからね。常任委員会で可決されたものが本会議で否決されるというのは、ないわけではありませんが、極めて珍しい。

ところが、世論の高まりを受けて10月10日、自民党県議団が会見を開き、改正案の取り上げを表明し、その3日後に正式に撤回されたということがありました。この「世論のたかまり」がどのようにして起こったか、なんです。最初は埼玉新聞が報じました。放置を虐待と明解に明示した条例案というのは、全国的にみて初めてだというような文脈でした。とくに問題点を指摘するような書きぶりではなかった。その翌日のテレ朝の報道ステーションが、10分間の特集として放送しました。報道ステーションというのはおおよそ1時間の番組です。60分間のうちの10分というのは、我々の業界ではそれなりのサイズ感の特集です。埼玉の公園で子供を遊ばせているお母さんたちに、「これやられたら私たち全員、毎日虐待してますよ。」っていうような声を報じ、「子どもの行動あるいは保護者の行動を過度に抑制するもので、憲法違反の疑いすらある」といった専門家の声も紹介するといった特集で、条例案に対してかなり強く疑問を投げかける内容でした。

さいたま市のPTA協議会が反対署名を始め、提出を致しました。新聞、テレビ、報道各社が大きく取り上げて、SNSでも話題になったのはご案内のとおりです。

知るということ、そこに議論が起こるとということ、何かしらの動きに対して異議を唱えること、あるいは賛意を示すこと。その起点となるのがメディアの大きな役割で、今回はそれが非常に端的に、わかりやすく起こった、示された例かなと思っています。

テレビや新聞というのは、最近ネットの世界では「マスゴミ」と言われたりして、その存在意義が問われています。これまでと同じような取材手法が通用しなくなっているということも、後述しますが、実際にあります。ただ、「これ、おかしくないですか?」と社会に対して課題を提示をする、そのことでリアクションがちゃんとある、SNSも巻き込んでそこに世論形成というものとなされる。これはとても大切なことです。

衆参の補選が近いという事情もおそらくあったのでしょう。これで反論が巻き起こると、もと

もと苦戦と言われている自民系の候補がさらに苦戦を強いられる可能性があるということで、国会議員の方からも「ちょっと、ちょっと」ということが、恐らくあったんだろうと私は思いますけれども、そういうことももちろん手伝ってではありますけど、世論の動きというのが、条例案取り下げという帰結に非常に大きく影響したということは間違いありません。

この条例についてどんな問題点があるか、提案した議員団に取材して「これ、共稼ぎの家庭の留守番も虐待だとお考えなんですか?」、「そうですよ。」っていうやりとりを収録し、それに基づいて正確な報道するということが、問題点を指摘するということが、我々は大切にしています。詳細な報道をする、正確な報道する、そして速報性をもって皆さんにお届けする。これはどれも我々の非常に重要な役目です。

「詳細な報道」の中で最近議論になっているものの一つが、「実名報道」です。実名報道に限らず、詳細な報道をするということは、言論の自由を保障するという、これまでの積み重ねの一つの成果です。今、申し上げたように、市民が行動を起こすための起点としてたいへん重要です。市民の知る権利に対してメディアは奉仕をしなければならないという気持ちで我々やっています。これはもちろん災害時もそうですし、こうした通常時もそうです。そしてもう一つは、記録です。いま、言論の自由について「積み重ねてきたもの」と申し上げましたけれども、例えば「何が虐待に当たるのか」というのは、100年前から固定した観念ではもちろんないわけで、様々なトライアンドエラーがあって、議論があって、少しずつ変化し、定着していくわけです。そのなかで、どんなトライがあったのか、どんなエラーがあったのかということ、一つ一つ丁寧に社会の中に記録していくことはとても大切です。「ニュースは歴史の1ページ目」と言われる所以です。

「記録としての報道」について、その価値を強く実感するのはアーカイブ映像です。たとえば阪神淡路大震災の発災時の映像を5年、10年経って、あるいは20数年経って見たときに、リアルタイムで見たときの、その映像の持つ瞬発的な力とまた別の種類の力を、アーカイブというのは持ち始めるんだなと感じます。

映像は、みなさんにそのニュースを認識していただき、印象に残るようにという目的をもって放送します。ただ、2回、3回と同じ映像を見たり、ニュースの発生から時間が少し経つと、その映像のインパクトは、どうしてもいったん色あせていきます。ところが、ある一点から今度は逆に、記録としての価値を持ち始めます。

それは皆さんの家族写真でも同じで、例えば子どものいい表情が撮れたなと思うと、嬉しくて、リビングに飾ったりします。それがだんだん昔のことになると、今度は思い出として、「こんな笑い方してたなあ」とか、「この服、本当気に入っていて、擦り切れてもずっと着てたな」とか、そういう記憶としての、記録としての価値を持ち始める。

普段意識せずとも、振り返った時に「やっぱり残しとくって大事やねんな」ということを、我々は実感します。記録としての報道というのは、卑近な例に重ねれば、そういうことかなと思います。

そして「副次的要素として」とあえて書きましたけれども、社会的制裁機能を報道は持っています。

何かしら犯罪行為がおこなわれたり、あるいは社会的に不適切だと思われるような行為があったり政策がおこなわれたといったときに、その行為者の名前というのは、先ほども申し上げたように、具体名、実名として出てくる必要があります。記録としての報道というものが、詳細で正

確なものではないからです。詳細で正確であるほど、後日その価値を持つときに、その足がかりが強く大きくなります。ですから実名で報道するということには非常に大きな意義があると思っています。

ただ、実名が出るということは、その人が社会の中で生きていく上において、名前がいわゆる晒されることによって、ある種の制裁効果を生みます。というより、制裁効果が生まれるということの方がむしろ大きくクローズアップされることが、最近は多くなりました。

大学で授業をする際、裁判が結審して有罪が確定するタイミングまで推定無罪が働くんだというのをどれだけ言っても、学生の頭のなかで、逮捕された時点で「あ、犯人捕まったんや。」という認識がすごく強固なんです。その後容疑者になり、被告になり、判決を受けるまでは「犯人かもしれない人」です。よって繰り返し伝えるんですけども、でもやっぱり逮捕された瞬間に、多くの方は「犯人捕まったんや、どんな奴?」、「顔写真は?名前は?」となる。それは実名報道、詳細報道の重要性とは微妙に違います。

記録として具体名を残すことは重要ですけども、晒すという言葉の残酷さ、あるいはその残酷さ裏返し、ある種の正義感にドライブされた快樂のようなものっていうものを感じる人は、SNSと言わず、実社会と言わず、多くいるのだと思います。

実名報道が制限されるべきというのは、一つは障がい者による犯罪です。刑法39条「心神喪失者の行為は罰しない。心神耗弱者の行為はその刑を減刑する」。その人が更生し、共生社会の中で再び生きていくにあたって、その刑罰そのものが更生の意味をなさない場合には、罰するというのではなくて、治療であったり、指導であったり、教育であったりということが必要という法律構成ですね。

そして、もうひとつは少年犯罪です。少年犯罪、これは未熟な少年たちの倫理観なり、あるいは法規範意識といったものを、これから育ていくその過程において、名前が出てしまうことのダメージは大きすぎるし、制裁というのがその後ずっと軛となって、その人の共生社会での生活を妨げてしまうということを危惧して決められているものだと思います。少年法61条、家庭裁判所の審判に付された少年又は少年のとき犯した罪により公訴を提起された者については、名前も、年齢も、職業も、住所も、容貌等を出してはならないと定められています。

少年法が改正されたのは皆さんご存じだと思います。2022年の4月1日施行です。特定少年というものが設定されました。重大犯罪の場合には、家庭裁判所での審判には馴染まないということで、いわゆる逆送致、検察逆送というものがおこなわれます。これまでは故意に人を殺めた被疑者の場合は通常の裁判にすることで逆送されていたんですけども、18歳、19歳の少年については、より広範な犯罪行為が逆送の対象になることになりました。最高刑期1年の犯罪まで、例えば放火など、これまで逆送致の対象とならなかった犯罪も、犯罪の様態によっては逆送致されるという改正内容です。それと同時に、こうした「特定少年」すなわちかつて未成年として匿名で扱うことになっていた18歳、19歳については、場合によっては実名で報じて良いということになりました。

これは、我々のような、詳細な報道が必要だ、正確な報道が必要だ、実名報道に意味はあると言い続けているメディア側からすると、一定の意味はあるという捉え方もできます。ただ、可塑性の高い若者の将来に影響する可能性のあることですから、慎重な扱いが求められることは変わりありません。

当の18歳、19歳の学生の皆さんはどう思われますかね。18歳、19歳、これから社会に出ていく時に、何か罪を犯した時にその名前が世の中に出てしまうということについて。しかもSNS社会ですから、デジタルタトゥー、消えません。ずっとその名前っていうのはデジタル空間に残り続けるということになります。

そのことをどう考えるのかなと思って、相愛大学の授業の中でこの問題を取り扱ったことがあるんですけども、特定少年の名前が出るということについての賛成意見が26人、反対12人、ダブルスコアで、名前を出せるようにする改正は妥当だという意見が多かった。賛成意見は、「18歳であれば善悪の判断はできる」、「実名が出ないとなると、まあいいかという考えが生まれる」、これは本人に対する抑止効果ですね。「自分が罪を犯すかもしれない」ということについての抑止効果。「被害者、遺族の立場を考えると、罪を犯した本人が何歳であっても名前は出すべき」、これは裁判員制度などで被害者の審判参加というのがかなり進みました。このことはもちろんこれまでの裁判の中で、被害者あるいは被害者家族というのが置き去りにされてきたっていう反省に基づく変更ではありますけれども、処罰感情の亢進、厳罰化というのが一つ大きな流れとしてはあります。若い方もそれと同じような感覚をお持ちなのだなということが言えますね。

それともう一つ、「一般の人の規範意識が高まり犯罪の抑止につながる」、これは自分が罪を犯すということもそうですけれども、副次的にと言いますか、一般に「18歳から先は名前が出るんやで」っていうこと自体が、社会全体の規範意識、法規範に対する遵法精神を高めるんだ、そういう効果があるんだという理論もあり、それに依拠した意見かなと思います。

反対は少数でしたけれども、「居場所がなくなって、生きる価値がないと考えるようになるかもしれない」、「将来仕事に就けなくなってしまう可能性がある」、「将来自分が家族を持った時に、子供は関係ないのに犯罪者の子供とみられ、いじめられるんじゃないか」、そういう長い射程で物事を見ている学生さんもまたいらっしゃるということですね。

名前を晒して構わない、という意見の方の根底には、その犯罪者、あるいは犯罪をしたとみなされた人は、自分達とは別の「生来の悪人だ」割とデジタルに切り分けて捉える感覚があるようです。そして、そういう人とは関わりたくないと考えている。「同じ社会にいてほしくない」、「できたら帰ってきてほしくない」、「自分とは違うところにいてほしい」、というような意識がどこからか透けて見えるというところはあります。

実際、子供が生まれて、登園あるいは通学の中で、見守りのSNSアプリから「ちょっと変わった人が通学路に出てきてますから、保護者の皆さん気をつけてください」と言われると心配だし、そういう人が通学路に通学時間にいてほしくないなと思います。親として、たとえば、累犯性の高い、何度も罪を犯してしまう傾向が顕著なのは、薬物であったり性犯罪であったりといったところがあります。

そうした人たちが、隣人としてそこに存在すると思うと、警戒心は芽生えますし、正直なところ不安に思う気持ちも理解はできます。でも、そうした人たち、過去に犯罪を犯した人たちは、「元居た社会に居てほしくない」で社会は成立するんですか。その人たちは、じゃあどこでどうやって生活すればいいですか。そんな人たちだけ集まって何かコミュニティ作るんですか。

罪を犯した人も更生をして、「あかんかったな」と思って、「二度と罪を犯さないぞ」、「やり直すぞ」という思いを持って、もう一度社会の一員として、まさに共生社会の一員として暮らすために何が必要か、考え続けなければならない。学生さんにはそう言い続けています。

でも一方で、そうした意味での「共生」が困難を伴うことも、不安に思う気持ちも、感覚としては理解できる。どうやればその人たちと一緒にまた不安感なく過ごせるのか、我々も若い人たちと一緒に考え続けなければなりません。

実名報道についてもう一件だけ、京アニ事件というのがありました。京都アニメーション放火殺人事件。2019年7月18日に青葉真司被告が京都アニメーション第1スタジオに侵入し、ガソリンを撒き放火しました。スタジオが全焼、社員36人が死亡、33人が重軽傷を負った、類を見ない大変大きな放火殺人事件です。

青葉真司被告は大やけどを負い、そのまま通常の治療であれば絶命していたところでしょうけども、必死の治療を受けました。何としても本人の口から動機が語られなければならない、記録としても社会正義としても、逮捕、起訴され、真実が明らかにならないといけない。現在公判中です。本人の言葉が、公判が開かれるたびに出てきています。

この事件の直後に起こったことは、先ほど申し上げた障がい者の方であるとか、あるいは特定少年の実名を報じることとかという加害者の情報について、どれほど詳細に報じる必要があるかという議論とは逆です。被害者、京アニという会社と被害者遺族の皆さんが、「被害者の名前を出さないでほしい」と要望したんです。

これは私どもメディアにとっては驚くべきことでした。被害者の匿名に関する議論がなかったわけではありません。相模原の養護施設で殺人事件、そしてこの京アニの事件の後ですけれども、北新地の心療内科クリニックで放火殺人事件があったときも、そのすでに背負っている社会的偏見や様々なものに晒され生きてきた人たちについて、その名前を公表することとかという議論は確かにありました。

でも、京アニ事件の被害者のみなさんは、そうした事情があるわけではありません。そのご遺族と所属している会社から、名前を出さないでほしいと言われたことに、私たちは驚きました。

ただ驚く一方で、SNS上の議論を見ていると、いわゆるメディアスクラムを問題視する声は少なくありませんでした。取材の過程で、亡くなった方がどんな作品をこれまで作ってこられたのか、その原点はどこなのか、大学時代にどんな生活をされたのか、高校時代からアニメに対して興味があって、その才能の萌芽があったのか。そうであれば、ご遺族のご家庭にお邪魔して、「すみませんが、卒業アルバムをちょっと拝見できませんか。」「ご本人が書き残したのって何かありませんか」といった取材します。

それはご本人が社会に存在した意味をちゃんと記録として残す、伝えるための取材です。この事件の重大性を、その詳細性をもって、物語性をもって、皆さんの印象の中にきっちりとお届けする、というつもりでやっています。だけれども、遺族の方からすると、突然我が子を失って打ちひしがれているところに、〇〇新聞です、××テレビです、△△放送です、週刊何々です、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン。朝から晩まで家のチャイムが鳴る、みんな「お話聞かせてください」「卒業アルバムを貸してください。」「なんで何々テレビには貸してくれたのに、うちには貸してくれないんですか。」「そういう圧を受け続けるというのは、それは大変です。それをもってマスコミと呼ばれたら、返す言葉がないかもしれない。

しかも、いまは一旦名前が出たら、ネットを使って一般の市民がいろいろと調べることができます。「じゃあ昔は何やってたんだろう」、その名前でも当然検索をかける人が出てきます。で、検索をかけて「過去にこんなことがあったんだ」、「見て、昔はこんな絵を描いてたんやって、同人

誌でこんな描いてるで」などと過去を掘られる。別に悪いことしてないのに、プライバシーに属する事柄までが晒されていく。メディアスクラムの後に、そうした「ソーシャルスクラム」が待っている。

それを考えたときに、被害者の名前を公にすることに抵抗を感じる被害者、家族、遺族がいるということは、心情としては理解できます。

一方で、メディアには「市民が知るために伝える」という重大なミッションがありますし、ちゃんと残さなきゃいけないという使命感もあります。現実問題としては、現場の記者には、他社は報じているのに自分のところだけが情報が取れないという「特オチ」に対する恐怖もあります。

そうした現場の空気感、社会的使命、ご遺族のこと、そうしたことを色々考える中で、実名報道というのは今まさに岐路に立っているところです。

新聞各社は、ご遺族が、そして京都アニメーションという会社が名前を報じないでほしいと言いましたけれども、あえて、「これは社会的に意味のあることです。お一人お一人の尊い命が奪われた重い現実を共有するために、実名による報道が必要なのです」、「事件の全貌を社会が共有するための出発点として実名報道があります」、「検証、再発防止のためには実名報道が必要である」といった理路で名前を出しました。

皆さんはどのようにお感じになっているのでしょうか。この話も授業で扱いましたが、やっぱり学生さんにはなかなか響きませんでした。現代社会では名前が出るっていうことはリスクなんです。晒されるということであり、良いも悪いも丸裸にされるということであり、名前はできれば出してほしくないっていう姿勢はたいへん強固です。匿名性が担保されているSNSの世界での言論に慣れているというところもあるのかもしれない。

ちょっとだけ学生さんのその気持ちが揺れ動いたのが、アメリカテキサス州の小学校で銃の乱射事件があったときのニューヨークタイムズの紙面を紹介したときです。「FACES OF A TOWN'S OVERWHELMING LOSS (街を覆う喪失、その顔)」。その一人一人にこれからどんな未来が待っていたのか、どんな夢を持っていたのか、どんな笑顔を見せていたのか、どんな家族がいるのか。そうしたことを、顔写真と共に報じた新聞紙面です。

これが「晒されてほしくないという気持ちと、彼ら彼女たちが生きた証しとして報じることの意味と、みんなはどっちが重いと思いますか。」といった問いに、ちょっとだけ学生の心が動いたのを感じました。人々の記憶に、AさんBさんではなく、ジョンとして、トーマスとして、メアリーとして存在するということの意味を、少しだけ理解してもらえたかなと思います。

詳細に報じることの意味、具体性をもって、固有名をもって報じることの意味ということと、我々は向き合っています。神戸の東遊園地の慰霊モニュメントには、阪神・淡路大震災で亡くなった方の名前が刻まれています。その名前一つ一つに人生があるわけで、そうした人生をきっちり存在したものとして、記録として残すということの一端を、メディアは担っているということが、私たちの仕事のとても大きな一部分だということを日々感じ、そして自分に言い聞かせています。固有名ということについて社会の認識は変化している、でも変えてはいけないものもある。まさに現代社会のいち側面と言えます。

さて、テーマとしていただいた「ケア、防災」といったところについてもお話をします。私は2年前に育休を取りました。

日本の育休というのは生まれた子が1歳になるまで取れますし、保育所が見つからないなどの事情があれば延長もできます。例えばうちはそうですけども、妻が専業主婦でも男性も取ることができます。だから4カ月間、妻と子供3人と、私は一緒に過ごした訳ですね。

ただ、有期雇用の場合は注意が必要です。2年契約などの場合、「その2年の契約が育休の途中で切れてしまいます」という場合には、残念ながら育休を取ることができません。

現場に復職することが前提です。

夫婦両方共働きの場合には、両方時期をずらして取得もできます。会社の給与はゼロになりますが、雇用保険から、もとの収入の67%の額の育休休業給付金が給付されます。3分の2になってしまうわけですが、税が免除され、なおかつ社会保険料の支払いが免除されますので、大体8割強の収入は確保されます。

日本は育休については遅れてると言われることがありますけれども、実は制度としては国際的に比較してもかなり充実しています。そこに持ってきて、育児介護休業法が改正されて、産後パパ育休という、育休本体の前に、子の出生後、8週以内に4週間まで取得が可能な別の育休も設定されました。育休は1ヶ月前までに申請しなきゃいけないんですけども、この産後パパ育休に関しては1週間前までの申請でいいですよ、ということにもなりました。

さらに、労働者が合意した範囲で、育休中に働ける制度も組み込まれました。例えば僕がアナウンサーとして「この番組だけはやりたいねん」ということがあれば、「いやいや、育休中は雇用主は働かせてはいけない」ということを大前提としつつ、取り決めの範囲内で働くことができる。自由度がさらに上がったとも言えます。

さらには、一定以上の規模の事業所では、男性がどれくらい育児休業を取っているか公表してくださいね、ということも決められて、もう明らかにこれは、「男性も育休取れよ」という流れなわけですね。

制度もその運用も男性育休を後押しする雰囲気ですから、男性の育休取得率も徐々に上がっています。ずっとゼロに近い数字で推移していたのが、2010年代後半にかけて少しずつ上昇、2021年で13.97%という状況です。女性のほうは85%以上でずっと推移していてその差は大きいんですけども、男性も増えてきてはいます。

取得期間も見ましょう。女性で一番多いのは、1年から1年半ですね。子供が1歳になるまで取ります、というところですね。それが一番数値としては大きな塊になっています。

男性で一番大きな塊はというと、5日から2週間。大体1週間ぐらい取ります、という人が男性の育休の場合には多いですね。やっぱり女性と比べるとものすごく短いです。産後パパ育休だけの制度でも賄ってしまう。取得する人は増えているけれど、総じて育休期間が短いというのが男性育休の現状です。

さっき日本の育休は制度としては充実していると言いましたけれども、本当に自由度が高いです。海外と比較するとそれがよくわかります。パパクオータ制って聞いたことありますか。議会でのクオータ制のほうは耳なじみがあるかもしれません。一定程度「女性の枠」っていうのを作りましょう、「25%以上女性でなきゃ駄目ですよ」というような制度で、海外の議会では取り入れているところも少なくありません。

育休についても、北欧やドイツなどではクオータ制が導入されているところが多いようです。仮に収入保証のある状況で1年間の育児休業を取得しようとしても、母親が1年間通して仕事を休

んだり、父親が1年休んだりすることはできません。できないというか、権利としてはできますけれども、収入の保証はなくなります。母親と父親が重ねて育休を取ることができない国もあるし、権利としてはできるけれど、そうすると1年を待たずして収入保証が途絶えてしまうという制度の国もある。2人とも休む期間っていうのを作っちゃうと、1年の収入を確保した育休は取れないんです。とってもいいけど、収入が途絶える。

くどいようですが、母親が取得できる期間と、父親が取得できる期間を足してようやく1年なんです。女性が専業主婦の場合も、男性が育休を取ると収入保証の対象外になる国が多いです。つまり、1年間赤ちゃんを両親が面倒見る場合には、男性も参加しないと実現できないという立て付けになっています。今の日本は「男性も育児参加しましょうね」というメッセージが強いですが、ヨーロッパで言うと、それはもう当たり前で、専業主婦という存在もはやレアで、産後1年以内であっても、男性が育休をとっている間は女性は働いてください、社会に参加してくださいね、というような立て付けになっています。

「日本の育休制度は自由度が高い」というのはそういう意味です。自由度が高いということは家庭の状況に合わせてアレンジできる一方で「男性が育休を取らなくても育児がなんとか成立しちゃう」という状況も作れてしまう、ということでもあります。夫婦そろって給付金を受け取りながら育児に取り組むこともできるし、男性が全く休まなくても、1年、あるいはそれ以上、母親が休んで主に育児をすることもできます。私の場合は妻が専業主婦という状況で育休を取得しましたから、ヨーロッパの制度では成立しにくいパターンと言えます。

私の育休取得の理由は主に三つです。

一つは3人目の子どもだということですね。1人目、2人目の時に私は育休取りませんでしたけれども、「3人か、これちょっと1人で見るのは大変だな」という思いがひとつ。

もう一つは、コロナ禍ということですね。実家のおじいちゃんやおばあちゃんに来てもらおうにも、「お年寄りとは会わないでください」という時期でしたから、家族だけでの子育てを強いられる。家族だけということ、私が仕事に出しまうと妻だけということになってしまいますので、ここはちょっと一緒に頑張らないと、と思いました。

もう一つは、仕事が暇だったんです。第三子誕生の少し前に、自分が担当していたニュース番組、月曜日から金曜日までの夕方の番組が終了いたしまして、ちょっとしたキャリアの踊り場のようなところにいました。

ですから「育休取るなんて意識高いですね、偉いですね。」って言われるのがいちばん辛いんです。1人目、2人目が生まれたときには夕方の帯番組を担当していて、育休の「い」の字も想像しませんでしたから。月～金の帯のニュース番組というのは、少なくとも情報報道系を志してアナウンサーをやっている者としては一つの到達点です。夕方のニュース番組で、その局のニュースを取りまとめて出すメインキャスター。知事や市長とも丁々発止の議論で渡り合う。やりがいを持ってやりましたし、長男次男が生まれるときも、休もうかなと思ったことは全くなかったですね。三男誕生のときだけ休んだのはそういった事情です。「休めたから休んだ」という、やや受け身の育休取得だったので、お世辞にも男女共同参画の意識が高い、なんていえません。

で、休んで良かったです。これはもう本当に。

独身時代にはコーヒーしか入れられなかった私が、今朝も朝御飯をつくってから家を出ました。

基本的には三男が生まれた後は、私が朝ご飯担当になっています。味噌汁の出汁をどう取るのかも知りませんでした。お豆腐を手のひらの上で切るなんていうことができるなんて、想像だにしませんでした。「味噌汁に入れる乾燥ワカメってこんなに増えるのか!」と驚きました。パラッと入れれば十分だと、失敗を通じて学びました。料理をするというのは家族と向き合うということです。子供たちが好きなものも、目玉焼きは、長男は半熟が好き、次男はカチカチが好きとか。

独身時代は賃貸マンションに住んでいて、向かいの部屋の人と目が合っても会釈をする程度でした。「自治会って何ですか」というなめた態度で、地域の行事に参加したこともありませんでした。結婚後、多少はご近所とのつながりもできましたが、やっぱり劇的に変わったのは子どもが生まれてからであり、育休を取ってからです。

三男の出産が6月8日ですから育休期間と夏休みが重なりました。僕の子供の頃の夏休みの記憶はハッピーな記憶しかありませんが、大人は違うらしい。妻が「はあ、夏休みか。」って言っているのを見て、「いいやん、子供と毎日過ごせて。」っていう能天気なことを言っていたのは、過去の自分。家にいて、朝から晩まで3人の子どもと過ごす日々が1か月以上続くというのは、最高であると同時にかなりの人間的鍛錬の場でもあると、身に染みて実感しました。いまでも会社でそれなりにハードワークをこなしているつもりですが、体力、メンタル両面で、育休中の夏休みは段違いにハードでした。コロナ禍でしたし、家のことにながっぷり四つで取り組むことに慣れていなかったこともあるとは思いますが、

家族だけでどうにかしようとすると煮詰まります。ここにご近所との絆が生まれます。共有し、連携するのです。今日私がここにお邪魔するというので、うちの妻と3人の子供は、近くの同じく男3人兄弟の竹下家と一緒に公園に行っています。自転車の練習をすると言って、ご機嫌に行ってくれているはずですが、この講演が終わったら急いでそこに駆けつける手はずです。竹下さん本当にありがとう。

育休を経て得たものとして「妻への共感力」を挙げました。これは私の内面ではすごく大きな変化ですが、じっさいに寄り添えているかどうかは妻の方に聞いてみないと分かりません。でも変わったと思います。

例えば、私が仕事から帰ったときに、妻がそこに疲れ果てた顔でへたり込んで、取り込んだはいいが畳まれていない洗濯物の山があったとします。育休を取る前の私だって、疲れた妻を支えようとは思いますが、で、そこで何を始めるかという、洗濯物をたたみ始める訳ですよ。これをまずは片付けねば、と。彼女が疲弊している、まずはこれを片付けねばって思うんですね。

今、僕は、妻が疲弊してへたり込んで洗濯物の山があったら、「ちょっとお茶淹れようか。」っていうのが最初の行動になると思います。「今日どやった?」って言って、20～30分、お話をするとします。自分の話もすると思いますし、妻の話も聞くでしょう。「ちょっと聞いて、上のお兄ちゃんさ、小学校の帰り、歩いて10分やん? 今日なんて1時間半やで。なんでなん、ホンマ」「そやなあ。」っていう話を20分する、お茶を飲む。そこから一緒に洗濯物を畳む。なんかね、その方が洗濯物を畳むのが速いんですよ。課題を解決すれば笑顔になれる、と思ってたんですけど、どうも違う。笑顔になって課題をやった方が、よほど気分がいいし、早い。そういう気づきを得たというのは、家の中に4か月居た育休の手柄ですね。

私の仕事はニュースを扱いますが、その理解にも変化があったように思います。例えば子ども

に対する虐待のニュース。「未熟な親が、自分の感情を抑えきれず…」そんな印象を持ちます。もちろん基本的にはそうなんです。だけれども、じゃあ自分が1年365日、1日24時間、ずっと子供に対してニコニコで接しているかという、そんなことはない訳です。朝、小学校に行く時間が迫っている。「はい、ご飯終わった！すぐ歯磨き！」っていうときに、「フローリングの線を踏まずに歩く！」とか言ってゲラゲラ笑いながら忍者みたいに歩いている長男に対して、イラッとする訳ですよ。それだけならいいんですけど、牛乳をこぼす、ご飯を残すくせにおやつを食べたがる、おまけに雨が3日間降っていて洗濯物も乾かない、,,、そういうことが重なると、子どもをたしなめる声がつい大きくなったりする訳です。子どもに関係のないイライラまで子どもに向けてしまうなんてあってはならないことですが、現実には、日常の一コマとして起こりうる。もちろん、子ども手を上げたり、育児を放棄したりはしません。でも、このイライラの延長線上には「虐待」とされる行為があるのかもしれないと、リアルに感じる。「未熟な大人」という、自分とは別のグループがあるんじゃない。「虐待とみなされる線」を誰だっけ超えてしまう可能性があって、「どうやったら超えずに済むか」ということなんだと思います。「超えた人間はダメな人間、自分とは違う人間」、ということではないんだなということを、育児家事にどっぷり浸かってみると本当に痛感するわけです。ニュースを伝えるなかでは、家庭のこと、教育のことというのはけっこうなウエイトを占めます。そういったことに対する認識が変化するというのは、私にとっては大きなことでした。

私はいま、会社ではアナウンスセンター長という管理職です。家庭のある部下がおおぜいいます。「すみません、いま連絡があって、子どもが熱出しちゃって、お迎えいかなきゃいけないんです。」なんてことがよくあります。どんな仕事でもそうでしょうけど、アナウンサーも、その人ならではの声質やスキルを期待される仕事が多い。でも、「OK、とりあえず行っておいで。後のことは何とかするから。」と迷いなく言える。もちろん、育休を取らなくても迷いなく言えると思いますけど、熱を出して、親が迎えに来るのを待っている不安そうな子どもの顔が脳裏に浮かんで来て、やっぱりちょっと血の通った対応ができるようになったんじゃないかと、自分では思っています。育休は、育休は、大人の成長の機会でもあると実感しています。

ひょっとしたら私が育休で不在のあいだに新番組のプロジェクトがあって、「西がぴったりだな、新しい番組。あ、でも育休中か。じゃあちょっと無理だなあ。」ってことがあったかもしれませんが、何とも思いません。本当に負け惜しみでもなんでもなく、その間に仕事のチャンスがあらうが無かろうが、私にとっては本当に惜しくない、それくらい得たものが多い時間でした。

妻とは4ヶ月いっぱい喧嘩しました。コロナ禍というストレスのかかるタイミングで、家の中に大人が2人、子どもが3人、うち1人は新生児です。いくら避けようと思ってもストレスが溜まることはあります。恥ずかしながらたくさん喧嘩をしました。だけれども、たくさん喧嘩をする中で、たくさんの学びを得ました。喧嘩を回避する方法、負の感情を上手く逃がしたり、正面から取り組んだり、先送りしたりというスキルも多少は身に着けたように思います。先ほど申し上げた洗濯物の例ではないですが、困りごとを直接物理的に解決するのか、気持ちに寄り添うのか、ということにもつながるかもしれません。

これは、それこそ防災についても同じで、具体的な解決と精神的な解決というのを両立しなきゃいけないっていうことですよ。

では最後にその災害、防災について。

私はこれまでのアナウンサー人生で大きな地震の現場取材を二つ経験いたしました。ひとつめは入社1年目の阪神・淡路大震災です。1995年1月17日、私は新大阪の一人暮らしのマンションにいましたけれども、グラッと揺れたとき、寝ぼけていたこともあって、何が起こったのかわかりませんでした。生まれ育った岡山というのは地震の少ないところでした、その瞬間まで地震の揺れというものを経験したことがなかったので、「地震」の文字がすぐには頭に浮かびませんでした。古いマンションだったので、マンションが施工不良か何かで潰れたのかなと思いましたけれども、窓を開けてみたら周りは真っ暗で、停電が起こっていて、「うちのマンションだけが壊れたわけではないんだ。ひょっとしてこれが地震というものか」と思いました。寒さなのか、恐怖なのか、身体がブルッと震えました。真っ暗の部屋のなかで手探りで服を着替えました。電話も通じず、携帯もまだ普及する手前で持っておらず、社から呼び出されたわけではありませんでしたが、行かなくちゃならないような気がして、バイクに跨って出社しました。その日はラジオの速報を担当しました。

翌日は神戸市役所までバイクでがれきを踏み越えながら辿り着いてレポート。その翌日から、避難所となっていた神戸・東灘の商業高校で、数日間、取材車で寝泊まりしながら取材しました。アナウンサー1年目、なんとか自分の取材したものをネタとして放送に乗せたいなどという、なんとも、つまらぬ功名心のようなものを持っていました。今思うととっても恥ずかしいです。

一方で、「とにかくネタをとろう」と思いつつ、逡巡もします。避難所になっている体育館にお邪魔すると、当時のことですから、仕切りもない中に大勢の方が、底冷えする床板の上に直接、毛布を敷いて横になっていらっしやる。寝間着姿なんて、普段だったら人には見せられないような姿です。私どもはそこにマイクを持ち、カメラを持って入っていく。言いようのない申し訳なさを感じました。ここで何か伝えなきゃという使命感と、功名心と、パーソナルスペースに土足で上がり込むような申し訳なさに挟まれてもだえている、若すぎる自分というのを覚えています。

そして、阪神淡路大震災が起こった年は、ボランティア元年とも言われます。ボランティアというものが活躍し、注目された災害でした。

ボランティアというのは自発的なもので、「自分がやりたいものを、やれることをやるんだ」というのがその頃の定着した概念だったように思います。だから、自分の面倒は自分で見る。自分がやりたいことをやる。「ボランティアの組織化」ということが、なにか矛盾した響きを、当時は持っていました。例えば公園にテントを張って、「何か困りごとありませんか」と尋ねて回っているような若者もいたりしました。

そこから随分と時が経って、東日本大震災の取材をしました。なにせ巨大災害でしたから「どうやったら現地にご迷惑をお掛けすることなく取材できるか」とずいぶん考え、取材手法として選んだのがボランティアでした。ボランティアの一員として実際にがれきの撤去などの作業しながら、地元の方にお話を聞きました。そこで触れたボランティアのかたちには、隔世の感がありました。社会福祉協議会などが窓口になって、ボランティアを登録し、仕事を割り振り、指示やサポートをしていました。自発的という意味では確かにボランティアだけれども、目的やニーズに合わせて組織化されていて、ボランティアの概念がアップデートされていました。

岩手では、沿岸の多くの自治体が、「仮に沿岸自治体で津波被害、地震被害があった時には、ボランティアの拠点を少し内陸にある遠野に置く」という取り決めが事前にあったと取材で聞きま

した。その遠野を拠点にすると、沿岸自治体はどこも大体バスで1時間くらいなんです。津波の被災自治体には宿泊施設などほとんどありません。ああ、なるほど、こういうふうボランティアってというのは想定があって、組織化されて、運営がなされているのか、と阪神淡路大震災のときの記憶と重ねたときの違いに驚きました。

その二つの災害の間に、例えば中越地震の取材をした時に、「雪かきに困っているお年寄りが多いだろう」ということで、現地に「押しかけボランティア」じゃないんですけども、学生さんや若者が行って、「雪かきを無料でやりますよ」というようなことをやっていた人たちがいたんですけども、豪雪地帯において雪かきというのは、冬の間仕事ができない土建業者の非常に重要な収入源なんですね。なおかつ危険を伴う。ということで言うと、出掛けて行って善意で雪かきをすることが、現地の負担になったり、あるいは収入を得る邪魔をしてしまったり、ということが起こり得る。

だけれども、一方で「私はこれができる、やりたい」という思いを、どうやってその現場に反映させるか、その思いを地元で貢献できる形に落とし込むというのは、非常に重要なテーマとして残っています。この十数年で随分と組織化されて、効率化もされたんだなあとという一方で、自分の持ち味をどう生かすかということも大切です。例えば「散髪をしてあげられるスキルがあります」「臨床心理士としてカウンセリングで心理的負担を軽減できます」という申し出を現場のニーズとマッチングさせる、コーディネートをするといったことが、とても重要になってきています。

原発被災地の福島県楡葉町も取材しました。ここは、一旦全町民が避難したわけですけども、帰還が許されたタイミングで取材に入りました。楡葉では、地域をどう再生しようかという試行錯誤のなかで、町役場の近くに、学校や病院、住宅もぎゅっと集めて、コンパクトシティというものを作りました。コミュニティの再建にあたって、スピードやコストを考えると有効ではありますが。ただ、山あいにならないうちの集落は廃墟となるわけで、このコンパクトシティという新しいコミュニティがどう機能するのかというのは、これから5年、10年という時間をかけて見ていかなきゃならない問題でしょう。

大変難しい問題です。でも多くの東日本大震災被災地でこのコンパクトシティ構想を導入しています。確かに効率的なんですけれども、この効率性が何を生むのか、継続して取材したいと思っています。

最後に、「お風呂」に触れます。

阪神・淡路大震災の時に、私は被災地取材もしましたけれども、スタジオで様々なニュースを読むという役割もありました。「どどこに避難の方が何人今残っていらっしゃいます」、「どどこはガスが復旧しました」、「電気の停電が何区で何件あります。復旧のめどは、..」といった情報を、ラジオで淡々とお伝えするわけです。

当時は、「現場でとにかくいろんな取材をしたい」という使命感と青臭い功名心から、スタジオに居て、ただ発表情報をまとめて読むというのは、大切な役割だと頭ではわかっているけども、やや物足りなさを感じていました。

電気やガス、水道の復旧状況や、罹災証明の申請方法など、いろんな情報をお伝えするなかに「銭湯の無料開放があります」という情報がありました。まだ水道もガスも通っていないところも多かったですから、「この銭湯では何時から何時まで被災者の方は無料で入れます、ご利用ください」というような情報も伝えました。

その後1年ちょっと経って、甲子園でセンバツ高校野球の取材をアルプススタンドでしていたときに、高齢の男性から声をかけられました。

「あんた、西さんか。」

「はい。」

「毎日放送の。」

「はい。」

「あんた、震災の直後に、どこでお風呂に入れるっていうのをラジオで読んでくれたでしょ。あれで私ね、2週間ぶりにお風呂に入れたんですよ。生きた心地がしました。なんとなく聞いてたラジオだったけど、あんたの『どこそこの銭湯でお風呂入れる』っていう言葉だけね、輝いて聞こえたんですよ。ああ、お風呂に入れると思った。入ったらねえ、本当に生きた心地がした。ありがとう。本当にありがとうね」っておっしゃっていただいたんです。

涙が止まらなかったですね。なんだろう、1年経って、思いがけない言葉をもらったっていうのがまたね。

そうおっしゃっていただくまで、銭湯の無料開放の情報のことなんて忘れていました。「これは伝える意味がある」という使命感をもって伝えた言葉じゃなかった。なんだったら、「スタジオじゃなくて早く現場に行きたいな」って思ってた。何の気なしに読んでいた、もちろん丁寧には読んでいたつもりですけども、その情報の一つが、その人の生きる力を支えたことに、1年経って気づかされた。

ああ、この仕事していて良かったな、って思いました、入社2年目の春。そのことが、報道情報系で頑張っていこうと思った自分を支えています。そんなことがあったせいか、その後もいろんな被災地に行くたびに、「お風呂は？」っていうのが気にかかります。お風呂って大事です。

もちろん、ガスが復旧したという情報も大事、電気が通るという情報も大事、給水車が来るといふ情報も大事。その一つ一つを「ああ、これで子供にミルクをあげることができる」、「これで家の片付けがちょっと進む」、というふうに必要な思いをもって受け取ってもらう。そのために我々はいます。

おひとりおひとりの行動の起点に「情報を知る」ということがあります。私にとっては、それを気付けさせてくれたのは「お風呂入れます」という情報がこんなにも大事な情報として受け取ってもらえたのだ、という体験でした。

冗長な話になってしまったかもしれませんが、最後までお付き合いいただきありがとうございました。「知る」ということが、現代社会においてどういう意味を持つのか、そのためにメディアがどういう役割を果たすのか。防災と、地域と、そして家族をケアするためにどんな役割を果たすのか、といった観点で今日はお話をさせていただきました。

ご清聴ありがとうございました。